

● 奨励賞 ●

「知る」ことで行う支援

ならむら り こ
榎村 璃子



せ た が や
東京学芸大学附属世田谷中学校2年(神奈川県)

今日、日本の領土問題の中核となっている北方領土問題。これを常に意識して生活している日本人は、一体どれだけいるのでしょうか。

私はこの問題について、四島の名前程度しか知らないというのに、何となく理解しているつもりでいました。しかし、その甘い思い込みは映画「ジヨバンニの島」を見て大きく変わったのです。

「ジヨバンニの島」は、元島民の得能宏さんの体験をもとにした実話で、色丹島で平和に暮らしていた二人の幼い兄弟が、ソ連が北方領土に侵攻してきたために過酷な運命をたどる物語です。

ある日突然、主人公の純平とその弟寛太の住む島に現れたソ連軍により、島民の自由と平和は奪われてしまいます。家族は引き裂かれ、ふるさとである島からも追い出されて、平穏な日常は断ち切られてしまうのです。

映画の内容は、正直別の国の話に思え、俄かには本当に日本で起きたことだとは信じられませんでした。もともと日本は島国なので、歴史的にも隣国との領土争いや、他国からの一方的な侵攻はほとんどありませんでした。また幸いにも、現在私たちが生きるこの時代の日本は平和なので、命が危険にさらされるという感覚や危機感がありません。それはよいことであると同時に、私たちを鈍感にもしているのではないのでしょうか。

戦争体験者の方がどんどんいなくなり、戦争の恐ろしさを知らない若者が増えているのと同様、元島民の方がご高齢になられ、私たちも北方領土について知る機会が少なくなってしまうと思います。私はそれが怖いと感じました。真実が体験者によって伝えられなければ、のちのち、また同じような事態が起こらないとは断言できないからです。

それでは、私個人ができることに何があるのでしょうか。まず、

家族や友人に、どれほど北方領土について知っているのかを聞きました。しかし、その多くは、その存在こそ知っていても、領土問題の歴史的背景や現在の状況はほとんど分かっていませんでした。私も以前はそうだったため仕方がないと思いましたが、やはり国民一人一人が、四島での出来事は自国で起こったものであると意識する必要があるでしょう。

なぜなら、私自身、北方領土について調べ始めてから、二、三日に一度はニュースや新聞で「北方領土」という言葉や文字を目や耳にするようになったからです。きっと以前も同じような頻度で何かしらの報道はされていたのですが、私の関心がなかったために、それらのニュースに気づくことさえありませんでした。しかし、関心を持ち、常にアンテナを張っておけば、それらの領土問題の動向に気づくのです。ですから、大勢の人が一つのことに共通して興味や関心を持ち、それについて「知る」ということは、大変意義のあることだと思うのです。

そして、最近知ったことなのですが、私の両親がふるさと納税で根室市に寄付をしたその寄付金が、北方領土の返還運動に関する事業の資金などにも使われていることが分かったのです。

私は、ふるさと納税をするというかたちでの支援の仕方もあるのだと知り驚きました。

最後に私が皆さんに伝えたいことは、北方領土問題はスケールが大きすぎて、自分には関係がないと思ってしまっている日本人が多いですが、家族や個人単位で支援することができ、北方領土について知ったり考えたりすることも立派な支援の一つだということです。私は、このような大きな問題こそ、一人一人の意識の集まりが大きな柱となり、解決へ向かう支えになると信じています。皆さん、今一度、自分の中で、意識のアンテナを高く張り直してみませんか？